

この 50 年間の変化あれこれ

菅 泰雄

北海道方言研究会が無事に 50 年周年を迎えた。この 50 年の間、世の中は大きく変わった。季候も大きく変化し、「猛暑日」という言葉も生まれた。北海道でブリが獲れるようになった一方で、鮭、イカ、サンマなどの漁獲量が激減するなど異変が起きている。

2019 年後半からの「新型コロナ」の世界的大流行によっても、世の中が様変わりした。その一つにリモートでの学会、研究会の開催が普通になった。本研究会の例会も、リモートでも行われ、遠方からの参加も容易になった。会員の拡大につながれば幸いである。私自身は、その方面の技術に不案内で、未だリモートでは参加できないでいる。

方言調査で必須の録音機材・記録媒体もカセットテープ、デジタルオーディオテープ (DAT)、IC レコーダー、フロッピーディスク、USB などと大きく様変わりした。

これまで言語調査には、公共交通機関を利用してきたが、この 50 年ほどで、交通網が大きく変わってしまった。ほぼ 50 年前の道内の国鉄の鉄道網 (注 1) と現在のものを比べると、30 近い路線が消え、見る影もなくなっている。これまでの調査で利用した江差線、松前線、池北線、日高本線 (鶴川〜様似間)、広尾線などはもうない。過疎化、大赤字を考えるとやむを得ないとはいえ、「鉄分不足」で寂しい。

本命の言葉も、大きな変化が見られる。思いつくまま、いくつか挙げてみる。まず、北海道弁の「〜 (っ) しょ」。井上・鎌水 (2002) を見ると、「『〜でしょう』。北海道弁として有名になった。…漫画やテレビドラマでも活用される。北海道では促音を失ってショとも言われる。千葉県木更津では、北海道から集団移住した子供たちから周囲に広がったと認められ、今、さらに拡大しつつある。静岡市で『そうっしょ』という。」とある。この「〜しょ」は、今や全国区である。必ずしも、北海道弁が広まったというわけではなく、若い世代や相撲取りなどの発話に見られた「〜っす。」との関わりも考えるべきであろうが、北海道でこの言語変化が先行していたとも言えよう。

このような言語内要因による言語変化が、一部地域で方言として先行して現れ、その後、全国的に広がった例は、「ラ抜き」をはじめ多く見られる。動詞「違う」の形容詞型活用もある。井上・鎌水 (2002) では、「関東北部や東北部では、昔から使っていた；埼玉・千葉を経て、東京の下町の若者の言葉になったらしい」とある。「違くて、違かった」は全国的に広まっている。

雰囲気「フインキ」になる変化も、「北海道・新潟・四国各地・熊本に点在。中学生では全国的に半数以上が使う；親は近畿で 20% 程度なのを除くと 10% 以下だから、一世代で急に普及したわけだ。」 (前掲書) とある。これも地域を問わず広がっている。(北海道方言研究会 20 周年記念論文集『ことばの世界』所収論文を参照されたい)

最後に、「米 (こめ)」の用法の変化について触れておく。金田一 (1981) は、英語の rice と比べながら、「日本では、まず田圃に植物として生えているときから、『稲』といって名前が違います。それから穀物としてはお米で、出来上がった、食料になるものはメシとか御飯とか言います。」と述べているが、最近では、「御飯 (ごはん)」というところを「コメ」という言い方が広まりつつある。「この海苔の佃煮はコメにも、トーストにも合う。」のように。今後、言葉はどんな変化を見せることだろう。

注・参考文献

注 1：『時刻表復刻版戦後編・2 昭和 47 年 3 月号』日本交通公社出版事業局 1984 年

井上史雄・鎌水兼貴編著『辞典〈新しい日本語〉』東洋書林、2002 年

金田一春彦『新 NHK 市民大学叢書 10 日本語の特質』日本放送出版協会、1981 年